



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『伊勢物語』本文の研究〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	松本, 裕喜
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第12075号
Issue Date	2016-03-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61591
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Yuki_Matsumoto_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学） 氏名 松 本 裕 喜

学位論文題名 『伊勢物語』本文の研究

本論文は、従来の『伊勢物語』研究において、学習院大学蔵本を中心とする定家本ばかりが重視されていることに異議を唱え、今までほとんど読み解かれることのなかった広本を中心とした他本に目を向け、複数の視点からそれらの本文を検討するものである。各章の概略を以下に示す。

【第一章 定家本『伊勢物語』を疑う】

第一節「六十三段「あひえてしかな」考」では、学習院大学蔵本における六十三段の冒頭部に存する「あひえてしかな」という本文を取り上げる。現行諸注の多くがこの本文の「え」を補助動詞「得」であるとした上で解釈を試みているのだが、収集した用例を分析すると、これに願望の意を表わす付属語が接続していると見るのは語法的に無理があると考えられる。この本文は、元来「あひ見てしかな」とあったものが、「み（三）」と「え（衣）」との字形相似による誤写によって転訛したものであると考えるのが妥当である。これを踏まえて他本に目を向けると、非定家本を中心に、「あひみてしかな」という本文を有するものが多く見られることが確認される。よって当該箇所本文は「あひ見てしかな」と定め、「契りを交わしたいなあ」の意で解くのが適切な処置である。この箇所に留まらず、これまで本文解釈の上で重視されているとは言い難い異本の本文に目を配っていくことが求められる。

これに続く第二節「四十四段段末本文考」は、四十四段段末の「この歌は、あるが中に面白ければ、心とどめてよます。腹に味はひて」という古来難解とされてきた本文を俎上に載せる。当該本文は、大島本や日大為相本には「…濃き味はひ、えしも出で来じ」という形で見え、用例の収集・検討を行うと、これがより古い形であると想定される。「濃き味はひ」は漢語「滋味」が訓読されたものと考えられ、学習院大学蔵本のような本文は、「こ（己）き（支）」と「ら（良）に（尔）」との相似により誤写が惹起されたものと思われる。また、当該本文の「あるが中に」とは、「送別の宴で詠まれた歌の中で」ではなく、『伊勢物語』作中歌の中で」と解釈するべきである。本節の検討からは、特に大島本や日大為相本など、広本系諸本の本文の古態性を窺い知ることができ、異本として退けられてきたこれらの諸本の本文に分け入って読解作業を蓄積することが要請される。

【第二章 広本系諸本の本文】

第一節「大島本と阿波国文庫本」では、大島本と阿波国文庫本との先後関係について検討を加える。両者の本文を比較すると、傍記・誤写・本文混成などの複数の視点

から、大島本が古態を留めていることが確認できる。阿波国文庫本の本文は、大島本のごとき本文と他の写本の本文とを混成したものと考えるべきである。また、大島本・阿波国文庫本両本の段序について見ても、大島本が阿波国文庫本に先行すると考えた上での合理的な説明が可能である。従来の研究の中にも大島本の本文が阿波国文庫本の本文よりも古いといった指摘は見られるが、それらの中には主観的・恣意的なものも多いため、ここで取り上げた傍記や誤写の痕跡などといった、より客観的・合理的に判断することの可能な根拠によって本文研究を進めることが肝要である。

第二節「大島本と日大為相本・泉州本」は、初めに『伊勢物語』異本A段が本来は『伊勢物語』の章段として記述されたものではなく、ある段階で本文に紛れ込み、一つの章段として形成されたものであることを指摘した上で、大島本でこの章段が改行されず八十一段に続けて書き始められていることに着目する。この現象からは、当該章段を改行している他の本よりも大島本が古態を留めていることが認められる。次に大島本と日大為相本、大島本と泉州本とをそれぞれ比較すると、いずれの場合も大島本が先行する本文を有しているであろうことが推定される。これに加えて、大島本の本文には独自の表現世界があると考えられ、二条后章段・斎宮章段といった章段群において、女の側が男に心を開いていることが強調されていると考えられる。ここまでの検討からは、従来読まれてきた定家本に対置させ得る本文としての大島本の重要性が明らかとなる。

【第三章 『伊勢物語』と物語】

第一節「二条后物語の成長」は、まず『大和物語』百六十一段の和歌「思ひあらば…」の詠者について考察する。当該歌前後の本文における敬語法の考察からは、この歌は二条后によって詠まれたものであることが確認される。その上で、『伊勢物語』三段に存する「二条後のいまだ帝にも仕うまつらで…」という注記的本文と『大和物語』の当該章段におけるほぼ同一の本文との先後関係について考えると、『伊勢物語』三段の成立→『大和物語』百六十一段の成立→『伊勢物語』三段に注記的本文の付加といった過程で現在見られる本文が成ったと考えるのが妥当である。また、この前提に立つと、現在広く受け入れられている、業平私家集所収歌を基準とする『伊勢物語』の成立論についても、再考する必要があるといえる。

第二節「紀有常歌の本文変成」では、『伊勢物語』十六段において紀有常が詠んだ和歌「手を折りて…」を取り上げる。この歌の二句目は、学習院大学蔵本などによって、「あひ見しことを」の形で知られているが、広本を中心とする諸本の中にはこれを「経にける年を」とするものも見られる。「あひ見しことを」の形で解釈を試みている現行諸注の説にはいずれも従えず、この歌の二句目は元来「経にける年を」の形であったと考えるべきである。『源氏物語』帚木巻にはこの歌の下句を改変して用いたと思われる左馬頭の歌が見られるが、この左馬頭の歌では二句目が「あひ見しことを」という形になっている。『伊勢物語』の当該歌の二句目が「経にける年を」であったとすると、これが『源氏物語』において「あひ見しことを」と改変され、その本文を元として『伊勢物語』においても「あひ見しことを」の本文が生じたのだと考えられる。

以上、本論文では、複数の視点から『伊勢物語』の本文を検討した。これまで内容的に顧みられて来なかった大島本をはじめとする多くの伝本について、語義語法に忠

実な注釈を施し、定家本『伊勢物語』の研究とも切り結びながら、総体としての『伊勢物語』を捉える試みが今後積み重ねられる必要があろう。